

清水ヶ丘便り

SUWA SEIRYO HIGH SCHOOL NEWS

2011.3

vol.28

卒業生巣立つ

3月5日、本校体育館で第63回卒業式が行われました。当日は晴天の中、卒業生保護者・来賓各位・職員・在校生に見守られながら239名が本校を巣立ちました。卒業証書授与のあと、学校長のはなむけのことばがあり、同窓会長・PTA会長からは励ましのおことばをいただきました。続いて、卒業生から学校へ記念品の贈呈としてテントが贈られました。最後に全員で校歌を斉唱し、簡素で厳粛な本校の卒業式が終了しました。



2011年度大学入試 合格速報!

今年度のセンター試験は、大雪の影響が心配されましたが、1月15日・16日に予定通りに実施され、本校3年生(出願者235名・出願率97.9%)も無事受験しました。不況を背景とした国公立大学の人気は堅調で、全国志願者総数は約52万人で、前年から約1万5千人増加しました。平均点が上昇した科目が多かったこともあり、旧帝大を始めとした難関大や医学科の志願者が増加し、全体的には受験生の強気の志向が感じられる入試となりました。出願傾向としては「文低理高」で「教育」「医療」といった資格分野への人気が高く、大学卒業後の進路を意識した動きが見られました。

さて、今春の大学入試結果について、3月15日現在までに判明しているものを簡単にご紹介したいと思います。前期日程終了後も、中期・後期日程の受験のために粘り強く学習する生徒の姿も多く見られ、最終的な合格結果が期待されます。なお、最終的な合格結果につきましては、正確な集計ができれば本校HPで報告させていただく予定です。

国立大学(前期・主な大学)

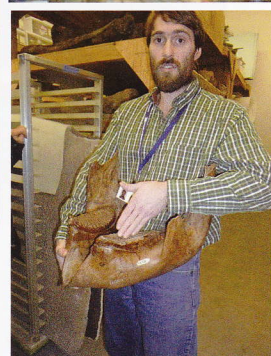
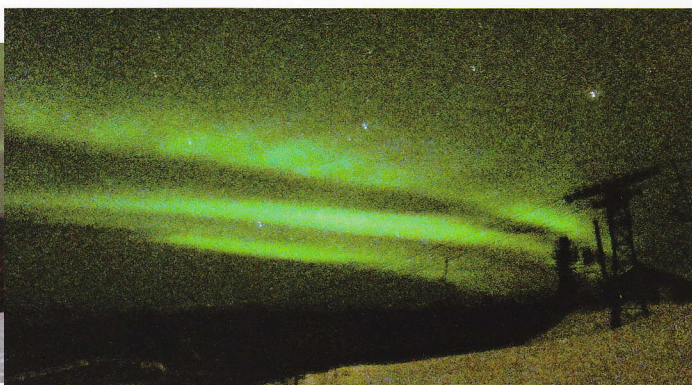
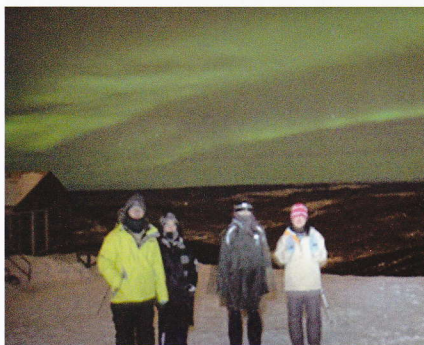
大学名	合格者数	過年度
北海道	3	2
東北	3	2
筑波	5	
お茶の水女子	1	
東京	3	1
一橋	1	
東京外国語	3	1
横浜国立	3	1
信州	29	4
名古屋	3	
京都	2	2
医学科	5	3

私立大学(主な大学)

大学名	合格者数	過年度
青山学院	9	1
慶應義塾	6	4
上智	6	1
中央	28	13
日本女子	5	1
東京女子	3	2
東京理科	14	9
法政	18	12
明治	22	14
立教	18	6
早稲田	31	10
同志社	7	4
立命館	18	6

3.15 現在

海外科学セミナーアラスカ研修 2月7日～2月12日



フェアバンクス郊外のスキー場スキーランドで3日間オーロラ観測

SSHの海外科学セミナーが2月7日(月)～12日(土)に行われS講座の生徒15名がアラスカ州フェアバンクスに行ってきました。国立極地研究所の佐藤教授による「オーロラ観測最前線」を受講し、年末には泊まり込みで観測実習をするなど、事前学習を十分して、観測に臨みました。運よく、3日間ともオーロラを見ることが出来ましたが、太陽風や地磁気、電子の励起、線ベクトルなど分かってはいても、本物のオーロラは神秘的で、広大な宇宙に飲み込まれそうでした。また、恒例のアラスカ大学での講義も3日間受けてきました。



野外での極寒実験。今年は意外と暖かったためシャボン玉が上手に凍りません。



「動物の冬眠」の講義の1コマ

アラスカ大学での英語の講義も頑張りました!



アラスカ大学名誉教授 赤祖父俊一先生を囲んで



インターネットミーティングで清陵高校と交信しました。



アラスカパイプライン見学。「SSH」の一文字です。

隊長のこぼれ 2年3部 古川 健人

アラスカに行く目的の一つは英語の練習だ。使用して上達するという意味ではなく、未熟さを知り励みにするという意味で、生徒の何人かがオーロラ観測地の小屋にいた人と話をしていた。私自身なるべく英語を使おうと心がけた。ダニーというおじさんと出会い、メキシコにクルージングをしに行くという老夫婦と話をした。私は実際の英語に触れて自分の無能さを改めて感じた。ほかの生徒も同じように感じ、勉強の励みにしていければいいと思う。

2 学年進路係より

11月27日(土)の自反会・土曜講座で2学年生徒対象の進路講演会を行いました。毎年行われているものですが、校外より講師の先生をお招きし、全体会・分科会の2部構成で実施。全体会は本校OBでクリンビー社長岡村和彦氏による「環境ビジネスへの挑戦」の講演。その後11の分科会に分かれ各講師の先生方の専門分野の講演を聞きました。生徒にとっては自分の興味のある分野を選んで聞ける講演会だったので、とても充実した講演会になったようです。どんな進路選択をするかを考えるととてもよい機会になりました。

<分科会の講師の先生方>

- 法学 丸橋昌太郎 信州大准教授 「大学で学ぶ法学」
- 哲学 八巻和彦 早稲田大教授 「清陵生であった自分と今、一哲学教員として」
- 外国語 岡田昭人 東京外語大准教授 「異文化コミュニケーション」
- 科学論 井山弘幸 新潟大学教授 「科学とユーモア～お笑い芸と科学の不思議な関係」
- 教育学 山岸雅夫 新潟大学教授 「発達と環境」
- 建築 片倉隆幸 建築研究室主宰 「建築家の仕事」 住まいと人自然とのつながり
- 工学1 亀田能成 筑波大准教授 「視覚情報メディア：画像処理から拡張現実まで」
- 工学2 前田敦司 筑波大准教授 「コンピュータソフトウェア：ネット時代の基盤技術」
- 農学・生物 原田昌彦 東北大准教授 「生命科学・農学を学ぶ、研究する、社会に役立てる」
- 医学 清水京子 東京女子医大准教授 「医師になるということ」
- 薬学 関根祐子 千葉大教授 「薬をつくる、薬をつかう」

卒業生の一言 ……今年度の卒業生から随想を寄せてもらいました

大学は、コミュニティの規模が高校より何倍も大きく、日々の学校生活を過ごしているだけでも、日本中(あるいは世界中)から集まった人たちと知り合うことができます。自分とは全く異なる環境で育ってきた人と話をしていると、清陵は他にない個性をもった高校であると改めて感じます。それは長い校歌や独特な地方会行事といった表面的なものに限らず、自治を重んじる校風も含まれます。大学では、自分で受ける授業を決められるなど、よくいえば自由な、裏を返せば自己責任が常に付きまとう4年間を送ることになります。その中で、自分がやりたいこと、やらなければならないことを見失わずにいるのは難しいですが、清陵で学んだ「自治」の精神を忘れなければ、充実した日々を過ごせるのではないのでしょうか。

また、勉強や部活、何事にも一生懸命取り組めるのが清陵生の強みだと私は思っています。とくに受験などは、山をひとつ越えたと思ってもさらに高い山が待ち構えているような毎日です。物事に対して、目標を立てるのは今すぐにでもできますが、最も肝心で最も大変なのは、その目標を達成するための努力を継続することです。継続は力なり、という言葉がありますが、私は、継続は才能だと考えています。誰もが持っているもの、簡単には発揮できない才能です。私自身他人のことは言えませんが、ぜひ皆さんも清陵で過ごす貴重な3年間で「努力の継続」に真剣に向き合い、実践してみてください。

慶応義塾大学
文学部

細尾 早霧



北海道大学
法学部

川島 吉人



大学に入学して早一年。この一年間、僕は新しい色々なことに挑戦することができました。文化祭実行委員、サークル活動、交換留学の選考試験など、本当に充実していた一年だったと思います。僕をそんな「頑張ることのできる人」に変えてくれたのは、高校時代での人との出会いでした。

高校入学当時、僕はとりたててやりたいことも無く、ただ漫然と日々を過ごしていました。そんな僕の中に革命を起こしてくれが個性的な友達や先生方、そしてバンド活動を通して知り合った仲間でした。「自反而縮雖千萬人吾往矣」の通り、清陵には個性的な人達がたくさんいました。皆さんの周りにも同じことが言えると思います。僕に何の刺激も与えなかった出会いは無いというくらいに、高校時代の人との出会いは、その一つ一つが価値あるものでした。もちろん、全部が全部いい刺激であったと断言はできません。ただ、出会った友達・先生方の言葉・行動が僕の中に「変化」を生み、何かに対して真剣に取り組むことのできる人間にしてくれたのは事実です。

大学に入ってしまってからでは、既に自分の中で考え方が固まってしまっているの、こういった刺激にたいして鈍感になってしまうような気がします。そういった意味でも、高校時代での人との出会いは、とても価値があるものだと思います。

皆さんは今、何か真剣に打ち込むことのできるものを持っていますか?持っていないという人は、まず周りに目を向けて下さい。そこにはとても価値ある出会いが待っているはずです。

学友会 コーナー

生徒活動紹介のコーナー

談論会

3月5日に卒業式が挙行され、その後本校学友会の伝統行事である談論会が1時間程度行われました。話したいことがある人は自由にステージに登り、自らの意見を述べるすることができます。

1月18日～20日
(フィギュア)
長野市で開催

スケート部

高校総体（インターハイ）出場



2年 野口真紀子



クラブ紹介 23 端艇部



まず初めに言いたいのは、端艇部の「端艇」とはボートのことだということです。つまり端艇部とはボート競技をやる部活です。では、ボート競技とはどんなものなのでしょうか。ボートは力任せに漕ぐだけの単調なスポーツだと思っている人が多いのですが、これは間違いです。ボートは力や体力だけではなく、たくさんの技術が必要とされる奥の深いスポーツというべきでしょう。この深いスポーツの向上のため、端艇部は日々努力を重ねています。

端艇部の練習は基本的に朝が乗艇で、放課後は陸上練習です。これは、朝は諏訪湖に波が立ちづらいためです。また、陸上練習はメニューが決まっていません。一人一人が自分に必要な練習を、自分で考えてやるのです。強くなるかどうかは自分次第という環境の中で、部員は互いに意識しあいながら切磋琢磨しています。このような「自主性」こそが清陵端艇部の特徴であり、他にはない強みだと思っています。この強みを生かして努力を重ねていけば、必ず夏に結果はついてくるはずです。今はそれを信じ、日々の練習に取り組んでいます。

端艇部キャプテン 土田 燎野